

からず驚かされると思はれる。景教の説述と道德經の所説との間に於ける類縁の深いことを示す文獻として、從來時代の判然としたものでは、建中二年建立の景教碑に先立ち、早くも貞觀十二年の詔がある。それにも拘はらず、余が貞觀十五年(641)に選述せられたと考へる一神論や、それとほぼ同時のものであらうと思ふ序聽迷詩所經に於ては、かゝる類縁の認められる點は少く、却つて儒佛二教との間に縁故を求めた文句の多いのが見出される。それが開元五年に寫されたと記してあるこの宣元至本經では、かほどまでに道德經に深い縁故を結んでゐるのを見ると、景教がその傳來の當初に於て、道德經の所説と近似の關係にあることを示したに拘はらず、なほ儒佛との間に調和を求めようと務めてゐたのが、唐室の老子崇拜の情勢に鑑みて、愈々深い縁故をそれに求め、開元五年頃にはかゝる經典が行はれるやうになつたものと見なければならぬであらう。さうして更に注意すべきことは、かゝる性質の經典が唐代の景教會に甚だ重視せられたと思はれることで、その徵證はかの景教三威蒙度讚に附けた尊經の經目の中に、多くの經典に先立つて、第一の常明皇樂經について、第二にこの宣元至本經、第三に志玄安樂經が挙げられ、これに敬禮すと記されてゐるのによつて知り得られることである。これもまた當時崇老の色彩の強かつた時代に於て、その教義を宣傳することに勉めた景士の苦心を認めるに足るものであらう。

なほ一つ注意せねばならぬことは、かの尊經の經目中にこの宣元至本經が挙げられ、さうしてその識語に於て、これが有名な景淨の譯出であると記されてあることである。この識語には、これまで何度も多くの人々によつて注意せられたやうに、そこに列舉せられた卅部(實は卅五部)は、本教の大德僧景淨を「皇帝が」召して、翻譯せしめたものであることが記されてあるが、然もその譯出が何時であつたかは示されてゐない。然るに新たに知られるこ